

毎月11日掲載

防災・減災のページ

巡回ワークショップ @東松島・宮戸島 月浜地区

むすび塾

山内良裕さん(61)は「初めて来た人にも津波の怖さを理解してもらいたい。震災時の津波の高さや到達範囲、避難ルートを分かりやすく示す必要がある」

「観光シーズンに津波が来たら、ちゃんと全員を避難させられるだろうか」。参加者からは、日帰り客の対応の難しさを挙げる声が上がった。実際、2003年7月26日にあった宮城県連続地震では、何度呼び掛けても逃げない海水浴客がいたという。

「観光シーズンに津波が来たら、ちゃんと全員を避難させられるだろうか」。参加者からは、日帰り客の対応の難しさを挙げる声が上がった。実際、2003年7月26日にあった宮城県連続地震では、何度呼び掛けても逃げない海水浴客がいたという。

「観光シーズンに津波が来たら、ちゃんと全員を避難させられるだろうか」。参加者からは、日帰り客の対応の難しさを挙げる声が上がった。実際、2003年7月26日にあった宮城県連続地震では、何度呼び掛けても逃げない海水浴客がいたという。

観光客の災害対策

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は7月29日、通算57回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を東松島市宮戸島の月浜地区集会所で開いた。民宿経営者ら住民6人が参加。今夏、月浜海水浴場が6年ぶりに本格再開したのを機に、観光客の災害対策を議論、震災時の避難を踏まえた方策を探った。

と述べた。大勢が一斉に車で避難すれば

避難が発生する恐れもあり、観光客を巻き込んだ避難訓練の必要性も話し合われた。進行役を務めた被災・復興支援機構(東京)の木村拓郎理事長は、震災の犠牲者がゼロだった月浜地区を被災教育の場として活用することを提案。民宿を経営する小野ひろ子さん(58)は「私たちの体験を語り継いでい

かなければ」と話した。

宮戸島は東松島市南西部にあり、石巻湾と松島湾に挟まれた島。面積約7.1平方キロメートル。東日本大震災では、震災発生から6月未だ現在で575人が住む。奥松島の豊かな自然に恵まれた、カキやノリ、ワカメで知られる。月浜地区はゼロだった。

宮戸島は東松島市南西部にあり、石巻湾と松島湾に挟まれた島。面積約7.1平方キロメートル。東日本大震災では、震災発生から6月未だ現在で575人が住む。奥松島の豊かな自然に恵まれた、カキやノリ、ワカメで知られる。月浜地区はゼロだった。

宮戸島は東松島市南西部にあり、石巻湾と松島湾に挟まれた島。面積約7.1平方キロメートル。東日本大震災では、震災発生から6月未だ現在で575人が住む。奥松島の豊かな自然に恵まれた、カキやノリ、ワカメで知られる。月浜地区はゼロだった。

宮戸島は東松島市南西部にあり、石巻湾と松島湾に挟まれた島。面積約7.1平方キロメートル。東日本大震災では、震災発生から6月未だ現在で575人が住む。奥松島の豊かな自然に恵まれた、カキやノリ、ワカメで知られる。月浜地区はゼロだった。

宮戸島は東松島市南西部にあり、石巻湾と松島湾に挟まれた島。面積約7.1平方キロメートル。東日本大震災では、震災発生から6月未だ現在で575人が住む。奥松島の豊かな自然に恵まれた、カキやノリ、ワカメで知られる。月浜地区はゼロだった。

津波の恐怖 明確に伝えて

観光地の災害対策

地域に詳しいのは住民!



◇津波など災害の恐ろしさ、震災時の体験談を伝える



◇地域の防災対策や避難ルートを説明する



◇避難を促す放送は命令口調で。サイレン、照明弾の活用も



東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は防災の巡回ワークショップ「むすび塾」を2012年5月に始めました。毎月1回、町内会や学校、職場などで開いています。名称には、人と人、地域と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けたいとの思いを込めました。次回

減災・復興支援機構専務理事 宮下加奈さん

専門家から 減災・復興支援機構理事長 木村拓郎さん



観光客が災害で犠牲になれば、私の出身地の三宅島(東京都三宅村)は定期的に噴火があり、災害時は高台に逃げて助かったという話を避難場所として伝えてほしい。美しい景観やおいしい食べ物があるのはリスクと共有するべきではない。避難を呼び掛ける放送は命令口調が効果的。車で移動する必要がある場合、定期的に入れ替えることで住民が集まる機会にもなる。

「奇跡の浜」を学ぶ場に
避難経路事前に決めて
観光客が災害で犠牲になれば、私の出身地の三宅島(東京都三宅村)は定期的に噴火があり、災害時は高台に逃げて助かったという話を避難場所として伝えてほしい。美しい景観やおいしい食べ物があるのはリスクと共有するべきではない。避難を呼び掛ける放送は命令口調が効果的。車で移動する必要がある場合、定期的に入れ替えることで住民が集まる機会にもなる。



揺れたらすぐ「てんでんこ」に逃げろという月浜地区の住民の話を示したり、避難路を分意図が、東日本大震災で犠牲者を出さなかった原因は、津波への意識が低い観光客をどう避難誘導するかが、今後の課題になる。

1983年の日本海中部地震の津波では、男鹿市に遠征に来た山間部の小学生13人が犠牲になった。宿泊客と違い、日区を、被災を学ぶ場として活用するの、一つの方法だ。



【参加して】観光客に噴火リスクを説明しているという三宅島の例が参考になった。観光客は避難が遅れがちで、震災が観光シーズンだったら宮戸島でも人の被害があったらどうしよう。お客さんを誘導する避難路を民宿に掲示したい。民宿経営・鈴木一男さん(68)



【災害に備えて】震災時は月浜地区の区長を務めていた。観光客向けの漁業体験では、必ず震災の経緯を話している。震災を風化させず、自分自身に言い聞かせる意味もある。「自分の命は自分で守る」ということを知ってほしい。漁業・鈴木善典さん(73)



【震災を経験して】民宿のお客さんに「被災当時のことを話してほしい」と言われることがあつた。私たちの体験や教訓を知ってもらうことは、誰かの命を救うことにつながる。今後でもできる限り語り継いでいきたい。民宿経営・小野ひろ子さん(58)



【災害に備えて】震災当時の経緯を互いに振り返ったのはよかった。今後の防災に役立つ。地震や津波への意識を宿泊客にも持つてもらいたい。チェックインした時点で注意事項を詳しく話すようにしたい。民宿勤務・小野かな子さん(32)



【参加して】震災当時の状況を住民同士で語り合う機会はなかった。薄れてきた記憶を呼び起こす貴重な場となった。観光客にとっても災害時の心構えとして生かされるよう、被災した経験をもっと発信したい。ノリ生産グループ代表・山内良裕さん(61)



【参加して】経営する民宿で震災の体験を宿泊客に伝えてきたが、忘れてきている部分もあった。避難の経緯などを今回の話し合いで思い出した当時の状況を、震災時の対応要領を立っ所に張って緊急時に備えたい。月浜行政区長・小野次郎さん(69)